

私は二〇〇二年七月一日に満六〇歳、還暦を迎えます。まだまだ若いつもりでいるのですが、人生のひとつきりにと、過去の記憶をたどってみました。記憶をたどり綴る作業をしているうちに、とどまっている記憶は決して過去のものではないことに気づきました。とどまっていた記憶がよみがえり、次の時代の「いのち」に合流していくのだと感じています。私の想いが、母から問わず語りに聞かされたように、少しでも娘たちや孫たちに伝わればいいと思っています。そして何かを感じてくれたらうれしいのですが……。

七月七日は忘れられない日です。一九六三年でしたから、もう四一年も前のことになりましたが、早朝、大塚の家の長い廊下に、父の「死」を知らせる電話のベルが鳴り響きました。その音は私のその後を決めるベルの音でした。

その時私は一九歳でしたが、周りの人々に支えられながら、いま還暦を迎えようとしています。降って湧いたような運命を、なんとか自分なりに納得しようとして頑張ったつもりです。学校時代の友達とはより、茶道、陶芸、読書会、俳句、旅行などからも、ステキな友人ができました。幸せな人生であると言えようべきでしょう。

淳子、佳子、京子、の健康な三人の娘に恵まれ、佑樹、佳歩、玉衣と三人の孫も産まれました。エネルギーな孫たちのあどけない顔を見るだけで、元気が湧いてきます。しかし新しい世紀は、地球規模で政治経済、環境、民族紛争など複雑で難しい問題を抱え込んできているようです。つぎの世代を生きる孫たちの幸せを願わずにはいられません。

昭和という時代の日本がうんだ悲劇の大波を、磯貝家もどつぷりと被りました。リヤウおばあちゃんは三人の息子を戦争で亡くした後、新聞紙上で「立派な軍国の母」と讃えられましたが、その後戦地に赴いた一夫叔父まで失い、悲しみは心の奥に閉ざされ、癒されることはなかったと思います。息子たちを亡くした母親の気持ちがどれほどのものであったか、毎日、朝な夕な、仏壇に向かっていた姿を思い出すと、胸がえぐられる気持ちになります。リヤウおばあちゃんや義母の受けた悲しみが二度と起こらないようにと思わない日はないのです。

時とともに戦争の事実が忘れ去られようとしています。私はせめて四人の叔父と義父の影を忘れないで生きて行きたいと思うのです。これからも、静かに記憶と語り合いながらささやかに先に進んで行くつもりです。そして、私の我がままな言動を黙って見過ごしてくれている夫・磯貝秀光に礼を言いたいと思います。

父のことを心よく話してくださった柴源一郎さん、浅沼柚太郎さん、本当にありがとうございます。お二人のおかげで、父の生きてきた歴史の一端を綴ることができました。また文章を寄せてくれた佐藤芳之、武子夫妻と姪の佐藤良子ちゃんに感謝いたします。

そしてこの本のアドバイスをいただいた李進熙先生、挿絵を描いてくださった川添修司先生、編集、デザインを担当してくださった柗光紘、まりえ夫妻、八月書館の皆さまに心からお礼申し上げます。

二〇〇二年春 磯貝ひろ子

### 増補版によせて

三年前、還暦の記念に出した『父へのラブレター』を読み返すたびに、叔父たちのことが書き足りていないのが気になっていました。今年（二〇〇五年）は戦後六〇年。気になりながらも手をつけられずにいた「叔父たちの最期」でした。それが思いがけない大きな病がきっかけで、何とか書くことができました。亡き叔父たちが私の背中を押してくれたようです。

お父さん！ 見当違いだと笑わないでくださいね。お父さんは照れ屋だったから何も言わずに逝ってしまつて……。子供心にもお父さんが背負ったものをずっと、ずっと感じていましたよ。

家長として母親の事はもちろん、弟たち妹たちへの責任と愛情、私はお父さんの年齢を超

えてようやく、その気持ちが解つたような気がします。私の癌再発は今のところ大丈夫のようです。

あれから三年、三女の京子も結婚し、次女・佳子のところには丈欣が生まれました。姪の芳子はリチャードと結婚してサンフランシスコで暮らしています。二〇〇四年八月末には女の子（波奈）が誕生しました。リチャードはスペイン系のアメリカ人なので、波奈はいろいろな民族の血を引いています。我が家の三人の娘は皆、長男のところ嫁ぎました。磯貝家の記憶は次第に薄れていくことでしょうか。せめてここに書き記したことだけでも、孫たちに伝えられたらと思っています。

叔父たちのことを調べている過程で、国のリーダーに大きな疑問を抱くようになりました。「食べられなければ死ぬ」。子供でも分かることなのに、補給もなしにビルマやニューギニアに進軍させた愚かな命令、そしてその責任をすり替えるかのように「英霊」扱いです。どの戦記を読んでもみても皆、戦争の愚かさを嘆いていました。あまりの惨さに読み進むことが出来ない箇所もありました。りゃうおばあちゃんのような悲しみが世界中から無くなることを切に祈っています。

敏文君いろいろありがとう。おかげで心につかえていたものが形になりました。

この増補版を作るにあたり、李進熙先生（和光大学名誉教授）には、「叔父たちの最期」と「ニューギニアのリニホフ」の内容に間違いはないか、原稿を読んでもいただきました。同

大学芸術学科教授・川添修司先生にはカットを、デザイン学科教授・柗光紘先生には表紙をデザインしていただきました。八月書館の尾下さん、お世話になりました。  
深く御礼申し上げます。

二〇〇五年二月 磯貝ひろ子